

〈存在のための場所=写真〉に向かって

日高 優 (写真批評家)

写真の根源に降りてゆく

写真は、あらゆる存在を無差別的に受け止める無限の書き込み版である。写真のうえでは、映し出されたものたちを隔てる境界は無いから、全ては等しく存在する。写真のこのような根源的性質にいま一度、思いを致してほしい。

写真は原理上、この世に存在するあらゆるものを光の痕跡として抱きとめる。自動筆記たる写真は、被写体を選別するということを知らず、いかなる存在をも等しく自らのものに招き入れる——北野謙は、写真の表面に、飽かず繰り返し像を焼き付けて、まっすぐに写真のこのような根源に降りてゆくのだ。彼はテストプリントの露光時間を重ね合わせる人数で等しく割り、その時間の分だけ一人ずつの存在を印画紙に焼き付けて堆積させ、一枚の our face を現出させる。

写真は光学機械と化学的处理に多くを負う意思なきひとつの表面に過ぎないと言え、それまでだ。だが、写真の根源的可能性を掴み賦活するほうに向かって人間が自らの存在を傾け接続するとき、瞠目すべき仕事が生み落とされる。在ることを無かったことにしようとする社会の力学に抗して為された、ローマン・ビシュニアックやゲイリー・ウィノランド、東松照明の仕事など。どんな絶望や混迷にあっても、なにごとかを為す人はいる。「為す」とはいえ、それは偶然に自らの状況に立ち至った人間が個人の意味を超えたところで突き動かされ、応答するような行為だ。そして、北野謙の〈our face〉プロジェクトである。

存在たちの風景、ミル・プラトー¹⁾

our face——私たちという複数者の、ただひとつの、不可能な顔——に北野を突き動かした〈偶然〉について、彼自身は社会的事件や自然災害を持ち出して語る。だが、それは、人間が立ち会う〈偶然〉の暴力が剥き出しになるひとつの契機に過ぎないかもしれない。単刀直入に言って、北野の写真が私たちを惹きつけてやまないのは、それが人間の根源的な欲望に触れるからではなからうか。つまり、ひとつの生命は少なくとも本人にとっては、いつでも殆どアクシデンタルな仕方と確率とでこの世に生れ落ち、ある状況におかれて生き、そして死ぬ。だからこそ、あらゆる存在が抱きとめられることを待っていること、〈他者〉が〈私〉に呼びかけていることを、この写真家は知っているようなのだ。

「〈存在するもの〉がこの世に存在するからには、〈存在する〉というただその資格によってのみ、存在は承認されるべきものだ」——北野謙の〈our face〉プロジェクトが具現化しようとするヴィジョンとはこのようなものであり、それに向けて北野は自らの存在を投入する。それにしても、偏った世界のありようのなかで、「存在するからには、承認され十全に存在するべきだ」というこの同語反復の命題は実現困難で、痛切に響く。他者の苦痛も存在も、多く者が行き過ぎるのがむしろ常。そんななか、北野は日本各地に始まり、イスタンブールから新疆ウイグル自治区、台北やタイのメイホンソーン、バンガラデシュのダカやイランのケルマンシャーにまで赴き、農夫に、軍人に、子供たちに、多くの人々に会い、それぞれの顔を暗室で重ねていくのだ。そして、実に途方もないこれら一連の作業を通じて、世界各地のローカリティを突出させる our face が立ち現れ、世界は場の多数の強度=差異を配置させるミル・プラトーとなって生起してくる。

存在のための写真——ヘテロトピア²⁾、あるいはもうひとつのグローバリゼーションのイメージ

無論、〈our face〉作品のそれぞれを、差異を参照点としてある国家、ある地域に根差して生きる〈社会的集団〉の観点からみることでもできる。our face A と our face B の間には、宗教の違いや支配・被支配を巡る緊張関係もあれば、親和性も認められる。そうした社会的次元をあるレベルで比較し語ることも、〈our face〉プロジェクトは拒んではない。だが、北野の捉える集団のローカリティを一体どのように整合的に分類可能だというのだろう。むしろこのプロジェクトは、各々のローカリティの肌触りを残しつつその分類の破綻や不能を露呈させ、ひたすら存在の次元を照らし出すために進行しているとみえる——すべての our face に共通する唯一の次元は、存在のそれに他ならないのだから。

our face が増殖して関係項が複数化し錯綜していくなかで、ある者と別の者を隔てる境界や、単純な二項対立的世界観は無効化されていく。例えばイスラム者とキリスト者の固定化された関係項が、女と男の、老人と若者の、漁師と農民の、軍人と市民の、商人と買い物客の関係項が纏れ合いすれ違い残響する写真集というイメージ空間で揺らぎ、主体の特権性がもはや問題にならない地点にまで運ばれる。〈our face〉プロジェクトとは、あらゆる存在を等しくイメージに抱きとめようとする「不可能なひとつの企画」^{プロジェクト}、「ひとつの

〈運動〉」のイメージなのだを確認せよ。

各々の作品は、連綿と続く終わりのなきプロジェクトの切断面を成す。不可能なヴィジョンに向かって、北野はこれまでに訪れたアジアから今度はアメリカへ、さらにはヨーロッパやアフリカへと現場を拡げていくことだろう。写真集のページをめくり、次々と繰り出される our face の隆起に立ち会い、このプロジェクト=運動を感受してほしい。サマルカンドの小学校で、東京多摩地区の公園で、カシュガル郊外のバザールで、さざめくデイトールの合間から存在=顔の波が継起する。スマトラ島沖地震被災地のバンダ・アチエでは、生と死の邂逅を幻視することく、失われた命を想う生者の our face が招喚される。

〈our face〉プロジェクトの産出するイメージ群は、目下の偏った繁栄と困窮とを押し広げるグローバリゼーションとは対極にある、「もうひとつのグローバリゼーション」のヴィジョンであるだろう。写真集のページを繰ると、存在のための写真という場所、ヘテロトピアが立ち現われる。

註

1) ミル・プラトー

単一の頂点やヒエラルキーをいさぐのではなく、多様な強度=差異が連なり形づくられる地形、「千の (= mill)、高地 (= plateau)」。アメリカ合衆国の文化人類学者にして思想家、グレゴリー・ベイトソンがインドネシアのバリ島調査で用いたこの語を、フランスの二人の思想家ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが借り出し、前出の新たな形で提起した概念。

2) ヘテロトピア

現実の空間でありながらも、同時に他のあらゆる現実の場を転倒させたり反転させたりする対抗的な、異他なる場。hetero=異なった、他の、topia は topos =場所、空間から。ここでは、偏ったグローバリゼーションに抗して、存在する者たちを世界で等しく抱きとめるという、もうひとつの「グローバリゼーション」の場=写真。フランスの思想家ミシェル・フーコーが空間、場の概念として精錬させて使用した。